

The Case with Nine Solutions
1928
by J. J. Connington

目次

九つの解決

5

訳者あとがき

297

解説 塚田よしと

303

主要登場人物

- リングウッド……………医師
- トレヴァー・マークフィールド……………クロフト・ソーントン研究所の化学者
- F・シルヴァーデイル……………クロフト・ソーントン研究所の化学部長
- イヴォンヌ・シルヴァーデイル……………その妻
- オクターヴ・ルナル……………イヴォンヌの兄
- ロナルド・ハッセンデイン……………クロフト・ソーントン研究所の職員
- エドワード・ハッセンデイン……………その叔父
- エイヴィス・ディープカー……………クロフト・ソーントン研究所の職員
- ノーマ・ヘイルシャム……………同右
- スプラットン……………金融業者
- ホエイリー……………前科者
- ジャステイス……………謎の情報提供者
- クリントン・ドリフィールド……………警察本部長
- フランボロー……………警部

九つの解決

第一章 瀕死の男

リングウッド医師はダイナーテーブルから席を立とうと椅子を引いた。マントルピースの上に置いてある時計を見て、今夜は夕食に戻ってくるのがいつもよりずっと遅くなったのだと気づいた。ここしばらく睡眠不足だったのが目元にも表れていたし、席から立つときも、疲労困憊のありさまが動きのしびしびににじみ出ていた。

「書齋にコーヒーを持ってきてくれないか、シェンストーン」と医師は指示した。「電話機も持ってきてほしい」

だるそうに玄関ホールを横切り、書齋の電灯をつけると、どうするか決めかねるようにふと戸口で立ち止まった。暖炉には火が赤々と燃えていて、厚手のカーペットが足に心地よい。大きな背もたれの肘掛椅子が、張りつめた一日も終わったのだから、ゆっくり体を休めて楽になさいと誘いかけてくる。テーブルに歩み寄り、またふとためらうと、郵便包装紙が付いたままの『英国医師会雑誌』を手にとった。テーブルに置いてある箱から葉巻を一本取り、無意識に葉巻の端を切ると、暖炉のそばの椅子に座った。

シェンストーンは、リングウッド医師のそばに小卓を引き寄せてコーヒーを置き、再び退出すると、今度は電話機を持って戻り、部屋の回線につないだ。

「こっちへ持ってきてくれ、シエンストーン。うとうとしても、ベルの音で確実に目を覚ますようにしときたいから」

シエンストーンが言われたとおりにし、部屋から出ていこうとすると、リングウッド医師はまた話しかけた。

「ところで、霧は晴れたかい？」

シエンストーンは首を横に振った。

「いえ。お戻りになったときより濃くなっております。濃霧でございますね。すぐその街灯すら見えません」

リングウッド医師はもの憂げにうなずいた。

「今夜は往診の依頼がないことを祈るよ。こんなに霧が立ち込めてるんじや、昼間でも、知らない町の行き先を見つけるのは難儀だ。もつとも、昼間なら、道を訊ける相手だつてどこにでもいるだろうが、今夜は警官しかいないだろうしね」

シエンストーンは気の毒そうな表情を浮かべた。

「確かに難儀でございますね。夜中に往診の依頼がありましたら、私を起こしてくださいませ。一緒に緒して道案内させていただきます。お役に立てるならなによりでございます。カリュー先生が入院される際も、精いっぱいのご奉仕をするようにと念を押していかけました」

疲れのじみ出た苦笑がリングウッド医師の顔に浮かんだ。

「君がいてくれても、ぼく同様、霧の中をよく見分けられるとは思えないよ、シエンストーン。夕食をとるのに戻ってくるときも、ほとんど歩道すら見えなかった。だから、いくら君に土地勘があつて

も、さして役に立つとは思えない。まあ、気遣いは恩に着るよ。この町の地図は持つてるから、それを見ながら行き先を探すさ」

医師が口をつぐみ、シエンストーンもきびすを返して出ていこうとしたが、「医師はまた話しかけた。「スコッチのデカンターとソーダ水をあそこのテーブルに置いといてくれるかい。そうすれば、今夜また君を煩わせずにすむからね」

「かしこまりました」

シエンストーンが部屋から出ていくと、リングウッド医師は『英国医師会雑誌』の包装紙を破りつつ暖炉に放り込み、雑誌のページを開いた。コーヒーをすすりながら目次にざっと目を通したが、数分も経たぬうちに、大きな雑誌は膝の上に滑り落ち、医師は心地よい環境にすっかり身をゆだねていた。

（開業医になんぞならなきゃよかった）と彼は思った。（専門職というのは確かにしんどい生業だが、こんなのが当たり前じゃ、開業医たるや、みじめな生活の典型だぞ）

医師は再び『英国医師会雑誌』を手にとったが、そのとき、玄関の呼び鈴の音が医師の敏感な耳に届いた。困ったような表情を顔に浮かべたが、シエンストーンが来客に対応するのが聞こえると、その表情はますます困り果てた様子になった。すぐに書斎のドアが開き、シエンストーンが来客を告げた。

「トレヴァー・マークフィールド博士でございます」

きれいに顔をあたった三十歳ぐらいの男が部屋に入ってくると、リングウッド医師は表情をなごませた。医師は席を立てて来客に会釈した。

「ようこそ、トレヴァー。暖炉のそばの椅子をどうぞ。先週この家に越してきてから、ずっと君に電話しようと思ってたんだが、時間がなくてね。このところインフルエンザが流行はやっているせいで、出ずっぱりだったんだ」

トレヴァー・マークフィールドは気の毒そうにうなずきながら、暖炉のそばに寄り、手を火にかざした。

「もっと前に訪ねたかったところだけど、今朝になってやっと、君がカリュー先生の代診医をしてると聞いたものだからね。君にしちゃ、ちよつと珍しいんじゃないか？」

「カリューは旧友だし、虫垂炎になって、急に診療業務を代わってくれと頼まれたものだから、さすがに断れなかったのさ。まあ、これも経験だよ。ここ五日ほどは、続けて二時間眠ったことがない。次の患者を無難に手術できるか、怪しいとすら思ってるくらいさ。麻酔なしで腹にメスを入れちまいそうだよ」

マークフィールドのいかめしい表情が少しやわらいだ。

「そんなにしんどいのかい？」と彼は訊いた。

「まあ、ほんとの病気なら仕方ないんだが。ところが昨夜、午前二時に、インフルエンザをぶり返した患者のところから戻ったとたん、また往診に呼ばれてね。患者は男の子で、『重症なんです、先生。すぐ来てください』ときたもんだ。行ってみたら、ただの食べ過ぎだったのさ。『この子の誕生日だったんです、先生。こんな日ぐらいはと、好きなだけ食べさせてやったんですよ』だと。着いたときは、子どもはもう吐いてしまっていてね——腹もすっきり、けろつとしていたというわけさ。もちろん、ぼくをたたき起したことに謝罪の言葉もなかったよ。医者は寝たりしないと思ってるんだ。次は

きつと、足の爪が肉に食い込んで死にそうだとかいう話があるよ。生死の境にある危篤の患者を救おうと切羽詰まってるときに、そんなことで時間をつぶすはめになったら、とんでもない話さ」

「人命は尊し、なんて考えがまだ残つてると言えるかね？ 戦争のせいでも、そんな考えも吹き飛んでしまったよ」マークフィールドはそう言うのと、手をこすり合わせて暖をとった。「今じゃ、人命はなにより軽いものさ。医療現場じゃなく、研究職を選んでよかったと思つてるよ。いまだに入院患者への親身な接し方を心得てないんでね」

リングウッド医師はテーブルのデカンターを指さした。

「一杯どうだい？」と勧める。「まったくひどい夜だよ」

マークフィールドは遠慮なく勧めに応じ、タンブラーにウイスキーを半分ほど注ぎ、ソーダ水を少し加えると、いかにも満足そうに飲み干した。タンブラーを置くと、暖炉に歩み寄り、椅子に腰をおろした。

「とんでもない夜だね」と博士はうなずいた。「町のこつち側を自分ちの庭みたいにしてなかったら、ここに来る途中で道に迷つてたよ。こんな濃霧はしばらくなかったからね」

「ぼくはもつとやっかいだよ。この町のことをよく知らないからね」とリングウッド医師は言った。「インフルエンザの流行もまだまだ衰えそうにない。研究職の君がうらやましいよ。クロフト・ソントン研究所だったよね」

「ああ、三年前の一九二五年にこの土地に来たんだ。シルヴァーデイルに化学部の部長ポストをとられてしまったね。ぼくは次席のポストをあてがわれたのさ」

「シルヴァーデイルだって？」とリングウッド医師はつぶやいた。「アルカロイドの研究をしている

男かい？ 最近、副産物として新たな凝縮物を発見したやつだな？ そいつの名前なら聞いたと思う」

「そいつさ。さほど煩わしい存在でもない。ときどき彼の家に夕食に招かれるけど、そのくらいのこととで、研究所以外で顔をあわせることはあまりないんだ」

「ずいぶん前に、喫煙社交会で一度顔をあわせたと思う。バンジョーの演奏がうまいやつだよ。きれいに顔をあたって、身なりもきちんとしたやつだろ？ 今は三十五歳くらいだな。ところで、そいつは結婚してるのかい？」

かすかにばかにしたような表情がマークフィールドの顔に浮かんだ。

「ああ、結婚してるよ。奥さんはフランス人さ。夫妻がこっちに来てから、ほくもアマチュア演劇で彼女と知り合いになってね。はじめのうちは楽しいけど、ずっと接しているとちよつと鼻についてくる女だ。最初のうちは彼女とよくダンスをしたけど、ほくの感覚からすると、ちよつと頻繁になりすぎた。男だつて自分だけで過ごしたい晩はあるもんだろ。彼女が望んだのは、いつまでも相手をしてくれるダンスのパートナーだったのさ。それで、研究所の新人職員に乗り換えたというわけだ——ハッセンディーンという青年さ」

「シルヴァーデイルはダンスをしないのか？」

「そう。たまにダンスをするだけで、好きじゃないんだ。変なカップルだよ。見たところ、共通点はないし、どうもお互い距離を置いて生活することで合意してるみたいだね。一緒にいるところなんかまず見ないよ。彼女はいつもハッセンディーンのカギにまとわりついてる——それなりに刺激的なにいちゃんだからね。シルヴァーデイルのほうは、エイヴィス・デュープカーという新鮮な果実にご執

心だ。研究所の女性職員の一人だよ」

「真剣なのかな？」リングウッド医師はさほど気もなさそうに尋ねた。

「離婚してもかまわんと思ってるんだらうよ。君の言う意味がそういうことならね。でも、イヴォンヌの不倫を持ちだしたところで、離婚が成立するかは疑問だけど。ぼくの見たところ、彼女はただ自分の楽しみのためにハッセンデイーンのガキを手なづけているだけさ。確かに、自分が獲物を仕留めたことをあちこち言いふらしてはいるけどね。自慢するほどの獲物でもないが。フニヤフニヤ腰砕けの、唯我独尊を勝手に夢想する青二才さ」

「シルヴァーデイルに手厳しいな」リングウッド医師は興味もなさそうに論評した。

トレヴァー・マークフィールドは鼻で笑って軽蔑をあらわにした。

「女一人にいいようにされてるやつは間抜けさ。シルヴァーデイルは彼女の一面しか分かってない——まあ、確かにその面ではとても魅力のある女ではあるがね。だが、どうやら、そんなのはどのみち長続きしなかったようだ——そら見たことかさ！ 女の本分を別にすれば、女つてのは男にとつて無益なんだよ。結婚すると、男の時間をやたらと奪いたがるし、おしなべてやっかいな存在になる。シルヴァーデイルの悩みに同情はしないよ」

リングウッド医師はさすがにうんざりし、話題を変えようとした。

「研究所つてのは、いいところなんだろう？」と医師は尋ねた。

マークフィールドは、いかにも、とばかりにうなずいた。

「最高さ。設備のためなら湯水のごとく金を使えるしね。今も、農業試験用に建てられた研究棟から来たところなんだ。町から数マイルほどのところにある。その分野の仕事をする部屋も一つ二つ、ほ

くにあてがわれてるんだ」

リングウッド医師が話題に応じようとすると、電話のベルが鳴り、医師は悪態をつきそうになるのを抑えながら電話機に歩み寄った。

「医師のリングウッドですが」

先方の用件を聞くと、医師は表情を暗くした。

「分かりました。すぐにお伺いします。ご住所はローダー・デイル・アベニュー二十六番地ですね……。できるだけ早く伺いますよ」

医師は受話器を置くと、客のほうを向いた。

「出かきなきゃならんよ、トレヴァー」

マークフィールドは目を上げた。

「いま、ローダー・デイル・アベニュー二十六番地と言わなかったかい？」と博士は訊いた。「なんてこった！ そりゃシルヴァー・デイルの家だよ。イヴォンヌの具合が悪いんじゃないだろうね？ もしかして、足を捻挫したとか？」

「いや、女中の一人が病気になるたらしい。今夜は家に誰もいないし、病人をどうしていいか分からないと、もう一人の女中が困ってるようだ。行かなきゃなるまい。だが、こんな霧では、どうすりゃ目的地にたどり着けるかな。場所はどこだい？」

「二マイルほどあるよ」

「そりゃ、ちよいと探するのが難儀だな」霧が深いのと土地に不案内なことを思って、リングウッド医師は不平たらしく言った。